

3年間の子ども交流・体験活動推進事業のまとめ

(1) 事業展開のモデル図



(2) 事業展開

事業主体	事業名	日程	活動拠点	活動内容
18年度	愛知県教育委員会	「であい・ふれあい・わかちあい夏合宿」 8月11日～8月14日 (3泊4日)	県美浜少年自然の家	山・海を舞台にした自然体験による異年齢交流 (小中高50名)
		「であい・ふれあい・わかちあい冬合宿」 12月23日～12月25日 (2泊3日)	県青年の家	日本の伝承遊びによる異世代交流 (小中高61名、65才以上のシニア世代15名)
19年度	瀬戸市子ども交流・体験活動推進協議会	①「品野の森・里山学校サマースクール」 ②「ふれあいキャンプin定光寺」 ①8月6日～8月7日 ②8月25日～8月26日 (1泊2日)	①名古屋学院大学合宿所 ②定光寺野外活動センター	①自然体験・クラブ体験による交流(小29名) ②自然体験による家族交流(21家族、小中56名)
	美和青少年キャンプ実行委員会	「友だちと一緒チャンレンジ・ザ・キャンプ！」 7月28日～7月29日 (1泊2日)	美和町民グラウンド他	資源の大切さを身近な施設を活用して学ぶキャンプ活動(小196名)
	蒲郡子ども交流体験活動推進事業実行委員会	①「海で遊ぼう！学ぼう」 ②「サンタさんのはやとちり」 ①8月4日～8月5日 (1泊2日) ②12月16日	①蒲郡市保健センター、竹島他 ②蒲郡市西部公民館	①自然体験、クラブ体験による交流(小30名) ②クリスマスパーティーなどによる交流(小18名)
	知立教育研究会特別支援実行委員会	「みんなと一緒 自然と一緒 in 茶白山高原」 10月15日～10月16日 (1泊2日)	休暇村茶白山高原	登山などの自然体験による交流(小中57名)
20年度	(財)愛知県教育・スポーツ振興財団	「感動！交流・自然体験 2007 in Summer」 8月15日～18日 (3泊4日)	県野外教育センター	ハイキングなどの自然体験による交流(小中59名)
	ふるさとワクワク体験塾実行委員会(樟豆町)	「ふるさとワクワク体験塾」 5月～12月 (計8講座開催)	愛知子ども国、稲垣町公民館他	自然体験、文化体験による交流 (小中・保護者他、8講座参加者総計250名)
	豊田市青少年健全育成推進協議会	「親子の地域間交流会」 8月3日～8月4日 (1泊2日)	名古屋市野外学習センター	自然体験、クラブ体験による交流 (小中・保護者他 総計122名)
	蒲郡子ども交流体験活動推進事業実行委員会	①「みんなで学ぼう！自然と遊ぼう！」 ②「サンタさんの“またまた”早とちり」 ①9月27日～9月28日 ②12月14日	①さがらの森 ②蒲郡高校	①里山整備を通じた自然体験(小30名) ②クリスマスパーティーなどによる交流(小25名)
チャレンジキャンプ実行委員会(知立市)	「知立チャレンジキャンプ」 8月4日～8月6日	知立市野外センター	自然体験を通じた自立支援 (小中11名)	
(財)愛知県教育・スポーツ振興財団	「つくろう友だち！体験しよう自然！in 旭高原」 8月26日～8月28日	果旭高原少年自然の家	自然体験による交流(小中54名)	

ア 応募・参加した児童生徒数 (人数)

	小学生		中学生		高校生		保護者・シニア世代		合計	
	応募	参加	応募	参加	応募	参加	応募	参加	応募	参加
18年度	161	80	50	21	11	10	19	15	241	126
19年度	532	379	36	30	1	1	49	25	618	435
20年度	551	411	52	42	0	0	39	39	642	492
合計	1244	870	138	93	12	11	107	79	1501	1053

イ 協力したスタッフ数 (人数)

	実行委員	青年	高校生	合計
18年度	21	20	*	41
19年度	86	55	56	197
20年度	130	122	64	316
合計	237	197	120	554

*：募集せず
 青年：県で養成した青年指導者（「青年リーダー」と呼ぶ）も含めて、18歳から35歳くらいまでの、子どもたちの体験活動をサポートした青年指導者数をさす。
 高校生：個人あるいは団体（部活動）として、事業に協力した高校生ボランティア数をさす。

ウ 取り上げた体験活動の内容 (%)

	人間関係作り	自然体験	文化体験	クラフト	野外炊飯	ファイヤー他	その他
18年度	11%	16%	21%	11%	11%	16%	16%
19年度	15%	26%	7%	19%	17%	9%	7%
20年度	26%	33%	6%	9%	14%	7%	6%

各年度の全事業日程の中で、各項目に示された体験活動の占める企画数の割合を示した。

エ 主な体験活動の事例

	人間関係作り	自然体験	文化体験	クラフト	野外炊飯	ファイヤー他	その他
18年度	アイスブレイク、班別ミーティング、交流タイム、井戸端会議	低山ハイキング、海上カヌーレース、火おこし	めんこ、おはじき、羽根つき、カルタ、福笑い、もちつき	ネイチャークラフト、竹とんぼ	カレーライス	ファイヤーのつどい、室内プラネタリウム	親からの手紙、わかちあいタイム
19年度	アイスブレイク、交流ゲーム	夜の森探検、山里歩き、川の生きもの、カッター、登山、動物観察、星座観察	竹馬、投げ輪等日本の伝統遊び	粘土細工、食器作り、貝殻アート、ツリー、焼板、絵手紙、木工	バームクーヘン、流しそうめん、カレーライス、BQ	ファイヤー、クリスマス会	救命講習、ロープワーク、親からの手紙
20年度	アイスブレイク、ふれあいタイム	昆虫採集、筏レース、野鳥・野草・動物・天体等観察、地引き網、無人島探検、里山歩き、火おこし、カヌー体験、アドベンチャーラリー、登山、川遊び	まゆ細工、竹炭、もち投げ、民話、凧上げ	木工、貝殻・画用紙アート、竹食器、キャンドル、木の葉書	水なしカレー、ピザ、流しそうめん、焼きそば、ホットドック、BQ	ファイヤー、クリスマス版ニュースポーツ、クリスマス会	親への手紙

オ 啓発普及の取り組み

	研修会名・開催日等	参加者数	取り上げた内容
18年度	「事業成果報告研修会」 平成19年2月23日（金） 14:00～16:00 自治センター	市町村青少年教育関係者等 （46名）	・講演「地域で人間力の育成にどのように取り組むか」（日本福祉大学情報社会科学部教授：中川晴夫） ・企画運営を担当した青年リーダーの方からの報告等 ・「であい・ふれあい・わかちあい合宿報告書」2000部発行、県内小中高等学校・市町村・社会教育施設等に配布
19年度	「人間力育成フォーラム」 平成20年2月12日（火） 10:00～11:50 東大手庁舎	市町村青少年教育関係者等 （62名）	・観点別活動報告と研究協議（進行：東海市教育委員会副教育長：藤原一成） ・危機管理、地域との連携、大学院との連携、青年との協働、事業評価等をテーマに協議 ・「活動事例集」2000部発行、県内小中高等学校・市町村・社会教育施設等に配布
20年度	中京女子大学准教授時安和行をチーフアドバイザーとして、野外活動を得意とするNPO法人・学校関係者の協力を得て「子ども交流・体験活動ハンドブック」を200部発行、市町村・社会教育施設等に配布		

(3) 成果と課題

ア 成果

子どもの人間力の育成を目指した3年間の継続した事業展開により、地域社会に多様な世代と地域団体、青年指導者との連携・協働体制が形成され、地域の活性化やその教育力向上に寄与する活動が可能となった。

地域における体験活動の拡大

青年指導者や高校生ボランティアが、行政や地域団体などと協働で事業を企画運営し、地域の実態に応じた体験活動が行われた。また、自然体験にとどまらず、身近な地域社会の歴史や文化をとらえ直す体験活動が企画され、多様な体験活動が展開された。その結果、子どもの人間力の育成に寄与する活動が、県内各地で展開された。

青年教育の機会の提供

県における青年指導者の養成事業である「愛知県青年講座」の修了生が、各実行委員会において継続的に指導的立場で企画運営に携わり、そのスキルアップが図られた。青年指導者の活用促進をはかることで、体験活動に果たす青年指導者の役割が行政や各実行委員会で認知されることとなり、充実した青年教育の機会となった。

次世代を展望した青年指導者の養成

3年間継続して事業にかかわった青年指導者が、行政や各実行委員会と協働し、地域における新たな青年指導者の養成に積極的にかかわった。この結果、一部の地域では、高校生など新たな青年指導者の養成の観点から、企画運営会議が開かれることとなり、次世代のリーダー養成まで視野に入れた事業が展開された。地域の子どもの青年が育成し、それを通して青年自らが育ち、また指導を受けた子どもがやがては青年指導者として活躍するという枠組み作りが今後期待できる。

イ 課題

多様な体験活動のプログラムの開発

自然体験やクラフト体験による交流にとらわれず、地域の環境・産業・歴史や伝統文化などを体験しながら学ぶ多様な体験活動のプログラムを開発したい。これにより、多様な世代と様々な職種をもつ地域住民との協働事業が可能となり、結果として子どもの人間力の育成が期待できる。子どもにとってもっとも身近な生活基盤である地域社会への興味関心を育て、地域社会との関係の中で自己実現の機会を提供することが必要である。

地域の教育力を高めるための協働のあり方

各実行委員会が、地域の多様な教育資源を結びつけるコーディネーターの役割を果たしたが、事業の継続性という観点から、地域の社会教育施設を活用し、それを拠点として体験活動が展開できるような体制をつくりたい。たとえば、毎年実施される社会教育施設のオープナーなどの機会を活用し、その開催に向けて、青年指導者・行政・地域団体との協働体制ができれば、より効率的な事業展開が可能となる。この協働体制作りを通して、地域の大人が子どもの育成に積極的に関わっている価値観を醸成することが必要である。

青年指導者のネットワークの形成

青年指導者は、子どもにとって、地域で社会貢献活動をする人間のもっとも身近なモデルとしての役割を果たす。異世代協働事業の教育効果を高めるには、青年指導者のサポートが欠かせない。継続した青年指導者のサポートを得るためには、その青年指導者間のネットワークをつくる機会を提供し、その組織化を図る必要がある。